産業文化研究 35
記録・報告（2026 年 3 月）

共生社会を目指したリンクウォークの実践

柏葉 英美

The Practice of Link Walk Aimed at an Inclusive Society

HIDEMI KASHIWABA

要旨

本報告は、認知症基本法の施行により「共生社会の実現」が政策的に明確化された背景を踏まえ、岩手県一戸町において町民主体で実施された「共生社会を目指したリンクウォーク」を、地域実践の一例として報告・考察するものである。

リンクウォークは、認知症や障がいの有無にかかわらず、誰もが地域づくりの担い手であるという意識の醸成を目的に、子どもから高齢者までの幅広い住民の参加により実施された。世界遺産である御所野縄文公園という屋外かつ歴史的･文化的価値を有する空間を会場とし､｢共に歩く｣体験を通して、対等性や自然な関りといった共生社会の理念を身体的・視覚的に可視化した点に特徴がある。さらに、トークセッションや現職介護職の写真展を組み合わせることで、介護の魅力や支え合いの価値観を言語的・時間的に拡張し、地域の記憶として共有する工夫がなされた。

その結果、本実践は、共生社会の理念を一過性の啓発にとどめず、地域住民が主体的に関与し、実感を伴って共有できる取組であったと評価できる。一方で、イベントとしての効果の持続性や地域全体への波及については、今後の課題として残された。

キーワード：共生社会　認知症　障がい　地域住民　認知症基本法　リンクウォーク　世界遺産　御所野縄文公園

Abstract

This paper examines the “Link Walk for an Inclusive Society,” a community-led initiative conducted in Ichinohe Town, Iwate Prefecture, in the context of the policy framework established by the Basic Act on Dementia. Through the shared experience of walking together in an outdoor World Heritage site, this initiative embodied key principles of an inclusive society-such as equality and natural interaction-visually and physically. The initiative visually and physically embodied key principles of an inclusive society, such as equality and natural interaction. The findings suggest that participatory, place-based practices can foster experiential understanding of inclusion, while challenges remain regarding the sustainability and broader diffusion of their effects.

Keyword : symbiotic society　Dementia　disability　local residents　The Basic Act Dementia　Link Walk　World heritage　Goshono Jomon Park

Ⅰ．はじめに

日本では、65 歳以上の高齢者人口の増加に伴い、認知症高齢者の増加が深刻な社会問題となっている。国は、認知症高齢者の増加を背景に、2012 年に「認知症施策推進 5 か年計画（通称：オレンジプラン）」[1)]を策定し、早期診断・早期対応、医療と介護の連携、地域包括ケアシステムの推進などを柱とした認知症施策を本格的に開始した。さらに 2015 年には、認知症施策の一層の充実を目的として、「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～」[2)]（以下、新オレンジプラン）が示された。新オレンジプランでは、地域において認知症の人やその家族、専門職、地域住民が相互に情報を共有し、理解を深め合う場として「認知症カフェ」の設置が全国的に推進された。こうした政策的動向を受け、筆者は中山間地域に位置する岩手県一戸町において認知症カフェを開設し、認知症当事者および家族への支援を行うとともに、地域住民を対象とした認知症普及啓発活動を継続的に実施してきた[3)～7)]。さらに 2019 年には「認知症施策推進大綱」[8)]が閣議決定され、認知症の人との「共生」と「予防」を車の両輪として施策を推進していく方針が明確に示された。加えて、2024 年には「共生社会を実現するための認知症基本法」（以下、基本法）が施行され、「認知症の人とともに生きる社会をつくる」という理念が国の責務として法的に明確化された。これにより、従来の「認知症にやさしい地域づくり」という施策的対応を中心とした枠組みから、「すべての認知症の人が、基本的人権を享有する個人として、自らの意思に基づき日常生活および社会生活を営むことができる共生社会の実現」[9)]へと、認知症施策の基本理念は大きく転換した。「尊重」や「希望」は、現在の認知症施策を特徴づける中核的な概念として位置づけられている。基本法において、共生社会の実現の主体は、認知症当事者を含めた社会全体、すなわち「私たち」、町民一人ひとりが、それぞれの個性と能力を十分に発揮し、相互に人格と個性を尊重しながら支え合うことにより、共生する活力ある地域社会の実現を推進する存在であると位置づけられている。

以上の政策的・理念的背景を踏まえ、本報告では、共生社会の実現に向けた地域実践の一例として、町民が主体となって実施した「共生社会を目指したリンクウォーク」（以下、リンクウォーク）について報告する。

リンクウォークは、認知症や障がいの有無にかかわらず、誰もが地域づくりの担い手であるという意識の醸成を図ることを主たる目的とし、あわせて共生社会の理念の可視化、多世代交流の促進、介護の魅力発信、地域活性化を意図して実施した。

なお、「リンク」とは「つながる」「結びつく」という意味があり、地域の方々が「つながる」「結びつく」ことで共生社会の実現を目指すという意味を込めたものである。

Ⅱ．開催地域の概要（岩手県一戸町）

岩手県一戸町は、岩手県北部に位置する中山間地域で、人口 10,603 人（2025 年）[10)]、高齢化率 46.8%（2025 年）[11)]と、人口減少および高齢化が進行している町である。町内には山間部が広がり、集落が点在していることから、交通利便性や医療・介護資源へのアクセスに課題を抱える地

域としての特性を有している。特に、高齢化率は県平均である 36.0%を上回る水準にあり、独居高齢者や高齢者のみ世帯の増加が顕著である。このような地域特性のもと、一戸町では、住民同士のつながりや地域内の支え合いが、日常生活を維持するうえで重要な役割を果たしている。さらに、認知症施策においては、認知症に対する正しい理解の促進や当事者及び家族の孤立解消を目的として、医療・介護専門職による支援体制の整備に加え、専門的支援と地域住民によるインフォーマルな支え合いを組み合わせた、地域包括ケアシステムの推進に向けた取り組みを行っている。

Ⅲ．リンクウォーク(LiNK WALK) とは

「リンクウォーク (LiNK WALK)」は、一般社団法人 KAiGO®PRiDE が企画・プロデュースする、介護職と高齢者(または地域住民)が共に歩く“ファッションウォーク”形式のイベントである。単なるウォーキングイベントではなく、介護の魅力や支え合いの精神を社会に発信することを目的とした参加型のショーとして開催されている。「一人では歩けないけれど、二人なら歩ける」というテーマのもと、介護職と利用者（高齢者等）がペアとなってランウェイを歩くことで、介護とは一方的な支援ではなく、相互に支え合いながら共に歩む営みであるというメッセージを可視化している[12)]。

本事業で取り上げる一戸町でのリンクウォークは、一般社団法人 KAiGO®PRiDE が展開してきた従来の枠組みを発展させ、介護職と高齢者に限定せず、子どもから大人、高齢者まで、地域に暮らす全ての人々を対象に広く参加者を公募して開催された点に特徴がある。

Ⅳ．共生社会を目指したリンクウォーク

１．目的

共生社会を目指したリンクウォークを通して、共生社会の実現、介護福祉人材確保、地域活性化を目指すことを目的とした。

２．開催日時：2025 年 9 月 23 日（火：祝）11：00～14：00

３．主催：いちのへチームオレンジさくらの会，　一戸町

(いちのへチームオレンジさくらの会の概要)

いちのへチームオレンジさくらの会は、地域住民による相互扶助および社会的関係資本の醸成を基盤とし、誰もが住み慣れた地域で安心して生活できる共生社会の構築を目的として活動している団体である。

本団体は、2017 年に認知症の普及啓発を目的として筆者が設立したボランティア団体「オレンジカフェさくらの会」の活動を発展させる形で結成され、2024 年 7 月 29 日から活動を開始している。なお、筆者は本団体の代表を務めている。チームの構成は、オレンジカフェさくらの会、一戸町図書館、一戸町社会福協議会（認知症地域支援推進員)、地域包括支援センター、認知症家族である。

４．**共催：**一般社団法人 KAiGO®PRiDE、岩手県介護福祉士会盛岡広域支部、社会福祉法人一戸町社会福祉協議会

５．**後援：**岩手県、岩手県介護福祉士会、八戸学院大学短期大学部

６．**協力：**御所野縄文公園、一戸町介護職員等確保対策協議会、岩手県立一戸病院

７．**衣装提供**：株式会社一戸ファッションセンター、株式会社ポトラガーデン他

８．**ヘアーメイク**：ルーブスヘアメイク、福田理容店、トモ美容室

９．**写真**：高村正彦寫眞館

10．**場所**：御所野縄文公園（岩手県二戸郡一戸町岩舘字御所野 2 番地）

御所野縄文公園内には御所野遺跡がある。御所野遺跡は「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産の一つとして、2021 年 7 月に世界遺産に登録された。この公園は、町の歴史的ルーツとして地域の人々に強い誇りとアイデンティを提供しており、町の文化的価値を全国・世界に発信する場所になっている。

11. **プログラム及びその内容**

１）**オープニングセレモニー**：11：00～11：20

オープニングセレモニーでは、一戸町立一戸中学校吹奏楽部による演奏が行われた。演目は、若年層から高齢者まで幅広い世代が楽しめる楽曲構成となっていた。また、演奏に加えて、中学生の MC を通じて、世代を超えた一体感が生まれ、リンクウォークの趣旨である「共に楽しみ、共に場をつくる」という姿勢がオープニングから示された。

図１　オープニングセレモニー一戸中学校吹奏楽部

２）**リンクウォーク：**11：20～12：00

リンクウォークは、「一人では歩けないけれど、二人なら歩ける」「誰もが主役！自分らしく！みんなでつくる地域社会」をテーマに実施された。御所野縄文公園の歩道に敷設したレッドカーペット上を、約 50 名（20 組）の参加者が、それぞれの個性を表現しながら

ランウェイを歩いた。

ランウェイでは、参加者一人ひとりの歩みに合わせて拍手や声援が送られ、会場全体が温かな雰囲気に包まれていた。特に、年齢や身体状況の異なる参加者がペアで歩く姿に対しては、共感や感動を示す反応が多く見られ、観客自身も「支え合い」や「共に歩む」というリンクウォークのメッセージを体感的に共有する場となっていた。

図２　リンクウォークの様子①

図３　リンクウォークの様子②

図４　リンクウォークの様子③

図５　リンクウォークの様子④

図６　リンクウォークの様子⑤

図７　リンクウォークの様子⑥

図８　リンクウォークの様子⑦

図９　リンクウォークの様子⑧

３）**トークセッション**：13：00～13：40

介護の魅力発信を目的に、「介護の新しい力、誰もが自分らしく安心して暮らせる社会へ」をテーマに一般社団法人 KAiGO®PRiDE 理事の小口貴幸氏をメインパネリストとして、現役の介護福祉士の安ケ平優心氏と障がい者施設職員の菊池春香氏を迎えトークセッションが行われた。セッションでは、それぞれの現場経験を踏まえながら、介護や福祉における支援の在り方、専門職の役割、そして地域社会との関係性について意見が交わされた。

図 10　トークセッション

図 11　トークセッションの会場の様子

４）**エンディングセレモニー**：13：40～14：00

一戸町に伝わる伝統的な民俗芸能であり、岩手県指定無形民俗文化財に指定されてい

る根反鹿踊りが、保存会の関係者と一戸南小学校の児童によって披露された。

一戸南小学校では、根反鹿踊りを学校の教育活動の一環として継承しており、児童は日常の学びの中で伝統芸能に親しみ、地域行事等での披露を通して地域文化の伝承活動に主体的に関わっている。本イベントにおいても、世代を超えた共演が実現し、地域文化の継承と交流の場としての意義が示された。

図 12　エンディングセレモニー根反鹿踊り①　図 13 エンディングセレモニー根反鹿踊り②

５）その他

①介護職への応援メッセージコーナ

参加者に介護福祉士への応援メッセージを記入してもらい、集まったメッセージを介護現場で働く人々へ届ける取り組みを行った。これは、介護を受ける側・支える側という関係を超え、地域全体で介護を支え、感謝や応援の思いを可視化する試みとして位置づけられる。

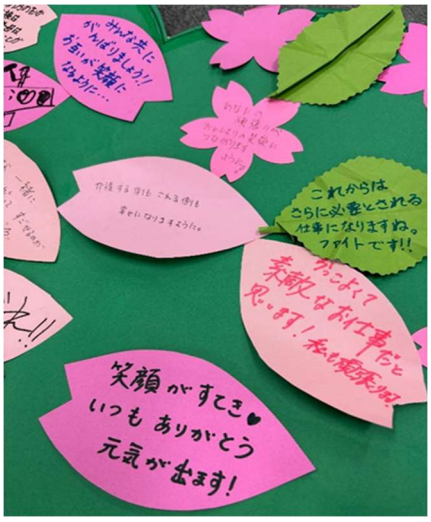

図 14　応援メッセージ①　　図 15　応援メッセージ②

②現役介護職のポートレート展示

一般社団法人 KAiGO®PRiDE 所有のポートレート 12 枚を展示し、介護福祉士の魅力発信を行った

Ⅴ．巡回写真展の開催

モデルとして参加した参加者については、プロのカメラマンによる写真撮影を実施した。撮影した写真は、イベント終了後、一戸町内の４か所において写真展として展示した。写真展終了後には、参加者本人に写真を贈呈した。

（写真展開催日時および開催場所）

１．12 月 5 日 ～ 1 月 4 日　　奥中山高原温泉煌星（きらぼしのゆ）の湯
２．　1 月 6 日 ～ 1 月 21 日　　鳥コ Kids ステーション（柴田物産）
３．　1 月 23 日 ～ 2 月 15 日　　一戸町コミュニティーセンター
４．　2 月 18 日 ～ 3 月 10 日　　IGR いわて銀河鉄道　小鳥谷駅

図16 巡回写真展①

図 17　巡回写真展②

Ⅵ．考察

本報告では、岩手県一戸町において実施したリンクウォークを、共生社会の実現に向けた地域実践の一例として位置づけ、その意義について検討する。

１．リンクウォークを屋外で行ったことの意義

本事業の実施にあたっては、天候に左右されるイベントであることに対する懸念を示すスタッフもいた。しかし、筆者は、本事業を、屋外空間をステージとし、御所野縄文公園を会場として実施することに重要な意義があると考えていた。

その理由は、共生社会の理念を、より開かれた形で可視化する上で、屋外という空間を有する特性が大きな意味を持っていると考えていたためである。

屋外空間は、福祉施設や会議室といった限定的な場とは異なり、参加に対する心理的ハード

ルが低く、認知症や介護に直接的な関心を持たない住民も含め、多様な人々が自然に集まりやすい特性を有している。そのため、共生理念を特定の関係者のみに留めるのではなく、地域全体へと広げる契機となり得ると考えた。また、屋外で「ともに歩く」という行為は、参加者同士が役割や立場を強く意識することなく、同じ速度で、同じ景色を共有する体験を生み出すことになる。これは、認知症や障がいのある人を特別な存在として区別するのではなく、地域社会を構成する一員として自然に共在する状況を創出し、共生社会の重要な要素である「対等性」や「自然な関わり」を体感的に理解する機会となるのではないかと考えた。また、御所野遺跡という観光・文化資源としての側面を持つ屋外空間での実施は、リンクウォークを「福祉イベント」として閉じることなく、地域の文化的行事や日常的な地域活動の一部として位置づけることが可能となった。

以上のことから、天候に恵まれた結果ではあるが、リンクウォークを屋外の御所野遺跡という歴史的・文化的意味を有する場で実施したことは、共生社会の理念を空間的・身体的・文化的に重ね合わせて可視化する試みであり、地域実践としての意義を一層高めるものであったと考えられる。

２．リンクウォークと共生社会

本実践の特徴は、認知症や障がいの有無、あるいは特定の支援の必要性にかかわらず、地域住民一人ひとりを共生社会の担い手として位置づけた点である。すなわち、誰もが同じ場に集い、共に歩くという行為そのものを通して、「ともに生きる地域」のあり方を可視化する試みであった。

また、リンクウォークによって可視化された介護の魅力を、その場限りの体験に終わらせるのではなく、地域に残し、共有し続けるための工夫として、リンクウォークで撮影した写真をパネル化し、イベント終了後に一戸町内の複数箇所で写真展として展示した。この取り組みによって、イベント当日に参加できなかった地域住民も含む多くの人々が参加者の姿に触れる機会が創出された。写真という媒体を通じて、参加者の歩みや表情が共有されることで、リンクウォークで表現された「支え合い」や「共に歩む」というメッセージが、時間的・空間的に拡張されたと考えられる。さらに、写真展終了後に参加者本人への写真贈呈は、参加体験を肯定的な記憶として個人に残す効果をもたらす可能性がある。自らが地域の一員として主役となり、その姿が記録・展示された経験は、参加者の自己肯定感を高めるとともに、介護や福祉に対する前向きな意味づけを強化する契機となったと推察される。

リンクウォークでは、体験の記録化、地域空間での再提示、そして個人への還元というプロセスを通じて、介護の魅力を継続的に可視化し、「一過性の啓発活動」にとどめることなく、地域の記憶として定着させる実践であったと位置づけられる。

３．トークセッションの意義

トークセッションにおいては、現役の介護・福祉専門職が自身の経験を語ることで、介護の仕事が単なる支援行為にとどまらず、本人の尊厳やその人らしい生活を支える実践であること

が言語化された。これにより、リンクウォークで視覚的・身体的に表現された「支え合い」の姿と、専門職による言語的説明とが相互に補完し合い、介護の魅力が多層的に伝達される構造が形成されたと考えられる。

４．限界と課題

本実践は、認知症の有無にかかわらず、誰もが地域社会の一員として同じ場に参加し、ともに歩むという体験を通して、共生社会の理念を可視化しようとする試みであった。

リンクウォークは、高齢者や認知症、障がいを特定の支援対象として捉えるのではなく、地域全体の課題として共有する契機を提供し、住民一人ひとりが共生社会の担い手であることを実感する場となった点に意義がある。これは、基本法が示す「認知症の人とともに生きる社会をつくる」という理念を、地域レベルで具体化する実践の一形態であると考えられる。一方、本実践はイベントという一過性の取り組みであり、その効果の持続性や地域全体への波及については今後の検討課題として残されている。中山間地域においては、限られた社会資源の中で住民同士の関係性が重要な役割を果たす。本報告で取り上げた実践は、こうした関係性を基盤として共生社会の理念を地域に根づかせていく可能性と課題を示す一事例として位置づけられる。今後、同様の地域実践の蓄積と検討を通じて、共生社会の実現に向けた具体的な方策がさらに明らかにされることが期待される。

謝辞

本イベントの実施にあたり、リンクウォークに参加・協力いただいた地域住民の皆様、ならびにモデルとして出演してくださった参加者の皆様に、心より感謝申し上げます。また、企画・運営にご協力いただいた企業・関係団体・関係機関の皆様、当日の進行や安全確保に尽力いただいたスタッフの皆様に、深く御礼申し上げます。さらに、写真撮影および写真展の開催にあたりご協力いただいた関係者の皆様に感謝申し上げます。

本実践は、本事業の運営に尽力してくださった一戸町社会福祉協議会の認知症地域支援推進員・小野寺幸葉氏のリーダーシップのもと、これら多くの方々の理解と協力によって成り立ったものであり、ここに記して深甚なる謝意を表します。

（引用文献）

１）厚生労働省：「認知症施策推進５か年計画(オレンジプラン)」について　(報道発表資料) https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002j8dh.html,(検索日 2026 年 1 月 27 日)

２）厚生労働省： 認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～」　https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/kaitei_orangeplan.pdf,（検索日 2026 年 1 月 27 日）

３）柏葉英美（2020）：地域住民の認知症の人に対する態度の関する研究－A 地域のアンケート調査からの分析－，岩手県公衆衛生学会誌，31(2)，ｐ5-18

４）柏葉英美（2020）：認知症フレンドリーコミュニティの構築を目指して－認知症カフェを起点とした取り組みの評価，令和元年度　岩手県立大学地域政策センター共同研究（ステージⅡ）地域包括ケアシステムに関する研究報告書，p49-62

４）柏葉英美・川乗賀也・藤井博英他（2021）：中山間地域で働く住民の認知症の人への態度とその関連要因，日本ヒューマンケア科学学会誌，14(1-2)，p83-91

５）柏葉英美（2021）：認知症フレンドリー事業報告書，いきいき岩手支援財団令和２年度いわて助成保健福祉基金助成金事業

６）柏葉英美（2021）：認知症見守り声かけ訓練の評価と課題，岩手県立大学全学競争研究費報告書，p1-44

７）柏葉英美（2022）：認知症フレンドリー事業報告（VR 認知症体験実績），いきいき岩手支援財団令和３年度いわて助成保健福祉基金助成金事業

８）厚生労働省：認知症施策大綱　認知症施策推進関係閣僚会議　（令和元年６月 18 日）https://www.mhlw.go.jp/content/000522832.pdf（検索日 2026 年１月 27 日）

９）内閣官房：共生社会の実現を推進するための認知症基本法(資料) https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/ninchisho_kankeisha/dai1/siryou2.pdf （検索日 2026 年１月 27 日）

10)岩手県ホームページ:一戸町基本情報(2025 年),https://machi-graph.com/prefecture/iwate（検索日 2026 年１月 27 日）

11）岩手県ホームページ：「市町村別高齢者人口および高齢化率」（令和７年 10 月１日現在），https://www.pref.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/003/633/r7-1.pdf（検索日 2026 年１月 27 日）

12）KAiGO®PRiDE： https://kaigopride.jp/archives/project/link-walk（検索日 2026 年１月 27 日）